

連載：原点

恵まれた環境の中で学び続ける教員として

佐原高等学校 三沢 駿介

私の教員生活は、生まれ育った秋田県から遠く離れた、千葉県立佐原高等学校から始まりました。初めての土地での生活は戸惑いも多いだろうと覚悟していましたが、通勤時や出張で通る道は新たな発見の連続で、毎日が刺激に満ちた日々となっています。

私が勤務する佐原高校は、進路指導重点校に指定されています。生徒たちは入学した時点から、卒業後の未来を見据えて高い目標を掲げています。私は2学年の文系と理系の両方のクラスを担当していますが、どちらにもいわゆる難関大学に挑戦できる力を持った生徒が非常に多く、こちらも「生徒たちの期待に応えたい」という強い思いから、日々の授業準備に熱が入ります。

教壇に立ち、授業を行う上で私が常に意識しているのは、生徒が「受け身」にならない授業づくりです。授業の冒頭で「この45分間で何ができるようになるか」「この単元が終わるまでに何を身につけるか」というゴールを明確に示し、見通しを持たせることで、生徒は自らの学びの道筋を理解し、主体的に取り組むことができるようになります。特に数学を苦手としがちな文系の生徒が、今学んでいることが最終的な目標とどう繋がるのかがわかることで、「なぜこれを学ぶのかかわからない」という理由で数学嫌いにならないように工夫しています。

また、授業の演習中は「机間指導」を大切にしています。生徒がどこまで理解していて、どこで躓いているのかを一人ひとりの机を回りながら丁寧に確認することで、多くの生徒が疑問を持つ部分を素早く見つけ出すことができます。そこで演習を一時的に中断し、全体に解説を行うようにしています。これにより、そのクラスの学習状況に合わせた柔軟な指導が実現できるようになりました。

新任教員としての日々は、失敗の連続でもあります。授業の「型」が少しずつ見えてきたと実感し始めた一方で、数学的な厳密さや言葉の選び方について、まだ課題を感じています。例えば、漸化式を扱う際に特性方程式を用いる理由の説明を間違えてしまったり、「 $x \geq 2$ 」と板書しながら「 x は2より大きい」と説明してしまったりといった間違いをしてしまうことがあります。このような小さなミスであっても、生徒の理解を妨げる原因になりかねません。こうした課題を克服するため、準備段階で他の先生方に相談したり、授業中は常に落ち着いて話したりすることを心がけています。幸い、佐原高校の先生方は本当に頼もしく、どんな質問にも快く耳を傾けてくださる方ばかりです。自分一人では解決できない授業の悩みも、遠慮なく相談できる環境は、初任者である私にとって何より心強い存在です。

教員生活はまだ始まったばかりですが、日々生徒と共に学び、成長する喜びを感じています。今後はこの恵まれた環境を最大限に活かし、生徒一人ひとりの学びを深めることはもちろん、教員として私自身も常に成長し続けられるよう、精進していきます。